

『草枕』における〈個〉に関する考察

金子真樹*

(e-mail : jinsu1110@hanmail.net)

目 次

- 1.はじめに
 - 2.漱石の創作態度から見えるもの
 - 3.漱石の「徴兵忌避」と久一
 - 4.那美における〈個〉と「非人情」
 - 5.おわりに
-

1.はじめに

『草枕』全13章に描かれている内容を、その顕著な特徴と見られる部分を大きく分けて把握してみるならば、芸術論、社会批評、生き方論の三つに集約することができると考えられる。

即ち、すぐに思いつくところでは、芸術論においては第一章に代表される〈芸術の必要性〉や第六章の〈同化問題〉、第七章の〈美しき土左衛門〉のモチーフなどがそれであり、社会批評においては第八章の〈久一の出兵〉や最終章の〈汽車論〉などが、生き方論として第九章の〈男女問題〉や第十二章の〈自殺問題〉などが挙げられる。

これらの三つの要素は、作者である夏目漱石の、創作上の配分により一つの章の内部において別々の場面でそれぞれ、または複合的に描かれたり、また場合によってはいくつかの章の中で飛び飛びに出現したりしている。『草枕』はこのように、いくつかの異なる構成

* 又松大学校, 外国人専任講師, 近代日本文学

要素から成り立っており、一見作品の主題としてはバラバラで、小説の展開としても少々散漫な印象を受ける。したがって、漱石がこの作品で結局何を言いたかったのか、という本質的な部分を突き詰めていくと、掴み所に乏しい感があり、全体としての『草枕』像をはっきりとさせることは、なかなか難しい作業であると思われる。

唯一全体を通して押し出されているキーワードが「非人情」なるものであり、主人公である「余」こと画工の、ものごとを「非人情」な目線で捉えるところに『草枕』を読み解く核心があることは疑問の余地がない。ただ、この「非人情」なる、漱石の持ち出した概念も、それをそのまま作品の主題であるとするには些か弱いものがある。

例えば「越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所を（中略）束の間でも住みよくせねばならぬ」¹⁾のが芸術であり、そのための「非人情」である、という本文の記述からすれば、ある意味で「非人情」とは一種芸術的に解釈した、人間の「生」についての〈衛生学〉のようなものと読むことができ、「利害の旋風」^{つむじ}に巻き込まれないで生きるために「非人情」を貫くことが必要である、とするような態度とは、結局〈渡世術〉のバリエーションに過ぎないとも考えられるからである。

また、そうした「非人情」の〈効能〉に限界があることは、既に第一章にて「もちろん人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はそう長く続く訳には行かぬ」と記されているように作者自身が重々認識していることであり、「非人情」がオールマイティーな有難い呪文でないことははっきりしている。

このように考えてみると、たとえ『草枕』における「非人情」が重要なエッセンスであるとしても、それだけで『草枕』全体を語るには何か不足しているように思える。この作品が、ただ主人公である画工が浮世を忘れて「非人情」な世界に遊び、それをスケッチしただけの紀行文であれば話は別であるが、「読者の頭に、美しい感じが残りさへすれば、それで満足」²⁾、という作者の弁にも関わらず「人情」あつての「非人情」、現実あつての詩典であることがある程度明確に打出されている『草枕』においては、「非人情」は必要条件にして十分条件には当らず、織物で言えば〈縦糸〉だけの繊維であつて、それだけではこと足りないはずである。

それでは、この作品の骨格を成している部分、言ってみれば〈横糸〉に相当する部分がないのか、『草枕』の作品世界を一枚の立派な生地として成立させている要素はないのか、と考えるに、そこにはある種一貫した作者の観念が反映されているものがある。それこそが〈個〉に対する考えであり、『草枕』を今一度読み返してみると、那美さんの

1) 夏目漱石『草枕』第一章。『漱石全集 第三巻』（岩波書店、1994年2月）3p。尚本稿に引用した岩波書店『漱石全集』の巻末には著者名が夏目金之助と記載されているものがあるが、本稿ではペンネームでそのまま表記することとする。また同全集からの引用文中ルビに括弧がついているものは岩波編集部によるものである。

2) 夏目漱石「余が『草枕』」。『漱石全集 第二十五巻』（岩波書店、1996年5月）211p

言動や久一の出征は言うに及ばず、社会批評や芸術論の端々にまで、作者が〈個〉を意識していることが伺える。

以下、この論考では『草枕』に〈個〉の問題がどのように投影されているか、というテーマのもと、当時の時代背景をも眺めながら、この作品を読み直してみたい。

2. 漱石の創作態度から見えるもの

まずは概論として、『草枕』執筆前後に漱石がいかなる考えを持っていたのかを明らかにすることにより、この作品に投影された〈個〉の意識について考察してみたい。

幕末の動乱の末1868年に成立した明治維新は、政治体制から科学技術、学問から芸術に至るまで日本人の生活様式や思考方法を一変させる大事件であった。その明治維新元年の前年に生れた夏目漱石も、やはりこの近代化のうねりの中で揉まれて生きた文化人の一人である。「西洋の開化」が内発的、つまりは段階を踏んで自然に発生したのに対し、「日本の開化」は200年の鎖国を経ていきなり4、50年の短期で行われた結果、「急に自己本位の能力を失って外から無理押しに押された」というのが講演「現代日本の開化」³⁾における漱石の論点である。少年期には二松学舎で漢籍を学んだ彼が、やがて帝国大学で英文学を修めるに至り、当時の文明最先端国であるイギリスに留学するもの「卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり」⁴⁾とカルチャーショックを受けて帰国するに至るのも、当時起こっていた日本における急速なく開化の軌轢がいかに大きかったかを物語るものである。

しかしここで大事なのは江藤淳が言うように「英文学に欺かれたるが如き不安の念あり」という疑惑こそが「文学史上誠に珍重さるべき疑惑であった。このような文学に対する反省は、彼以前には勿論、彼以後にもかつて一度もなされたことがなかった」⁵⁾ことなのであり、ロンドンで英文学に対する違和感を感じたからこそ、外国の文学のスタイルだけを追い求める「他人本位」な態度に陥らなくて済んだとも考えられる。

事実、それを逆手にとってというわけではないであろうが、漢籍という古い学問で培われた漱石の文学的ルーツと、明治政府の国費留学生として学んだ英文学の素養の合体は『草枕』第一章における〈和漢混淆〉ならぬ〈和漢英混淆〉という、ユニークな文体によって花開く。しかも、これは単に漱石の学問習得遍歴という単純な要素から成立し

3) 『漱石全集 第十六巻』(岩波書店、1995年4月) 415p-440p

4) 夏目漱石「文学論」の一節。『漱石全集 第十八巻』(岩波書店、1979年8月) 9p

5) 江藤淳『決定版 夏目漱石』(新潮社、1987年7月) 41-42p

ているのではない。「惜しい事に今の詩を作る人も、詩を読む人も、みんな西洋人にかぶれて居る」⁶⁾とは第一章における主人公の弁であるが、そこにはシェレーの詩を原文で引用しながらも、東洋人、日本人としての「自己本位」、すなわちアイデンティティーを忘れまいとする主人公の姿勢を見て取ることが可能であり、芸術家としての〈個〉の意識も感じられる。

江戸時代の封建制度下においては、お家大事、藩主たる殿様大事であり、〈個〉という概念は稀薄であったはずであるが、それが維新により封建社会が解体され西洋の新しい思想が流入する明治になると、ある程度の教養と知性を身につけた人間には、いきおい〈個〉を意識せざるを得ない環境が自然と醸成される。ところが、高度に中央集権化された政治システムや、西洋に追い付け追い越せという国家的、文化的な風潮が人間としての〈個〉や文化価値の〈個〉を押さえ込んでしまう構図にあったのが明治という時代であり、坂本竜馬に代表される幕末の志士たちの若々しさが成し遂げた変革は、新国家形成と発展の過程で、日本人が〈個〉を意識させられながらも完全に〈個〉を燃焼できない窮屈な社会、あるいは〈個〉を求めているようで、実は他に追随するだけの「他人本位」な、くすぶった土壌を社会に現出させるに至ったのである。また、明治維新という未曾有の変革の中では『草枕』の第二章などに顕著に表れるように、近代的〈個〉などという概念に囚われることのない〈古き良き時代〉への郷愁を捨てきれないもどかしさも生み出されてくる。

そうした時代の流れの中で、いかに自分のアイデンティティーを確立するかについて、当時の作家やインテリたちは懊悩の中で試行錯誤を繰り返すのであるが、「死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい」⁷⁾という夏目漱石もその一人であったと見ることができる。「維新の志士の如き烈しい精神」とは、「間違つたら神経衰弱でも気遣でも入牢でも何でもする了見でなくては文学者になれまいと思ふ」⁸⁾、という一種の芸術至上主義的覚悟である。もちろん、この『草枕』脱稿直後の勇ましい漱石の言葉が、「非人情」を押し出した『草枕』の主人公に、そのまま十分に反映されているとは言い難く、そのことはこの言葉が、有名な「草枕の様な主人公ではいけない。(中略)どうしてもイブセン流に出なくてはいけない」⁹⁾という鈴木三重吉宛の手紙における一節であることが物語ってはいる。逆に言えば、『草枕』のような小説を書いた直後だからこそ「草枕の様な主人公ではいけない」と漱石をして言わしめたと考えられなくもない。

しかし、作品中の「惜しい事に今の詩を作る人も、詩を読む人も、みんな西洋人にかぶ^(註)れて居る」という、ある意味で反時代的な警句や「ラオコーン杯はどうでも構はない」¹⁰⁾、

6) 夏目漱石『草枕』第一章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 10 p

7) 1906年10月26日付鈴木三重吉宛書簡 第二信。『漱石全集 第二十二巻』(岩波書店、1996年3月) 606 p

8) 前掲書606 p

9) 前掲7) 605 p

「ミレーはミレー、余は余である」¹¹⁾という叙述に、あるいは「画工は非人情的である。

沙翁は純人情的である」¹²⁾（強調は原文）という、当時の書簡の一節に、特に西洋を意識した漱石の芸術家としての〈個〉の追究〉に向けた姿勢が垣間見られる。また、そもそも漱石が「余が『草枕』」にて、自らのこの「俳句的小説」について「読者の頭に美しい感じが残りさへすれば、それで満足」と控え目に語った傍ら「此の種の小説は未だ西洋にもないやうだ。日本には無論無い。それが日本に出来るとすれば、先づ、小説界に於ける新しい運動が、日本から起つたといへるのだ」¹³⁾と、少々誇らしげに語っていることを考えれば、一種文芸における革命家の気概で『草枕』を書いたことは充分伺い知れる。現に『草枕』を執筆する直前の書簡を見ても「小生は何をしても自分は自分流にするのが自分に対する義務」¹⁴⁾と〈個〉が強調されているし、同じ書簡では「世界総体を相手にしてハリツケにでもなつてハリツケの上から下を見て此馬鹿野郎と心のうちで軽蔑して死んで見たい」¹⁵⁾と、「維新の志士」ならぬ、こちらは〈殉教者の覚悟〉のような、些か過剰とも見える表現まで用いている。

「世界総体を相手にしてハリツケ」になる、とはまさに自分たった一人で世界を敵に回しても己の信ずる生き方ができればそれでいい、という意味であるし、芸術に関して言えば「世界総体を相手に」するくらいの覚悟、すなわち孤独を恐れない覚悟がなければ優れた芸術作品を創作することはできない、という意味表明である。『草枕』の第六章で画工が、絵画の〈同化問題〉における「何と同化したか不分明」な同化、〈心持ち〉から来る内的な同化について「此調子さへ出れば、人が見て何と言つても構はない。画でないと罵られても恨はない」¹⁶⁾という孤高の芸術論を展開しているのは、そのことと密接に関係があるものと考えられる。

このように考えてくると、プロットや事件の発展といった基本的な小説的要素を破壊して書かれ、西洋にもない、日本にもない、中国にもないであろうオリジナリティーの重視された、〈和漢英混淆〉の一風変わった姿をも見せる『草枕』は、そのスタイルにおいて、命懸けで作家として〈個〉を求めようとする漱石の、当時における意識が強く反映されていると見ることが出来る。

このような漱石の気概が、もちろん日露戦争勝利による当時の国内における昂揚感とも深

10) 夏目漱石『草枕』第十章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 122 p

11) 夏目漱石『草枕』第十章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 86 p

12) 1906年9月30日付森田草平宛書簡。『漱石全集 第二十二巻』(岩波書店、1996年3月) 568 p

13) 夏目漱石「余が『草枕』」。『漱石全集 第二十五巻』(岩波書店、1996年5月) 212 p

14) 1906年7月2日付高浜虚子宛書簡。『漱石全集 第二十二巻』(岩波書店、1996年3月) 519 p

15) 前掲書520 p

16) 夏目漱石『草枕』第六章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 77 p

い関係がある¹⁷⁾ことは、あらためて述べる必要もないであろう。20世紀前半の帝国主義戦争の時代は、ある意味で国と国という、別の意味での〈個〉のぶつかり合いの時代であるとも言えるが、何しろ勝った相手はドストエフスキー、トルストイ、ツルゲーネフを生んだ国である。この勝利が単に西洋の大国を破ったことに留まらず、精神文化でも日本が彼らに対して劣るところがないという自負を、当時の文士たちに植え付けたこと、そして漱石もその例外でなかったことは想像に難くない。

現に漱石はある講演で「日露戦争というものは甚だオリジナルなものであります。インデペンデントなものであります。^{はなは}(中略)けれどもとにかく軍人がインデペンデントであるということはあるで証拠立てられている。西洋に対して日本が芸術においてもインデペンデントである^よという事ももう証拠立てられても可い時である」¹⁸⁾などと、妙に昂ぶった姿勢を見せている。そういう意味では、漱石の芸術に対する〈個〉の意気込みも、それこそまったくの「インデペンデント」でインディビジュアルな意識から来ているわけではなく、国家的な次元とは純粹には切り離せないようなものではある。が、しかし同時に「私は私を代表している、私以外の者は一人も代表しておらない」¹⁹⁾という漱石が、芸術創作における〈個〉の発現、オリジナリティーの尊重ということに並々ならぬ精神を注入していたことは、今見た如く『草枕』の作品や当時の漱石の言葉の端々に表れている通りである。

では次には、明治の時代に出現した、国家という巨大な〈個〉、膨張しつつある日本という〈個〉の中で、芸術家としてではなく純粹にパーソナルな存在、人間個人としての漱石はどうだったのか、ということについて『草枕』の中の、あるディテールに着目して考えてみたい。

3. 漱石の「徴兵忌避」と久一

「1867（慶応三）年生れの男漱石は大日本帝国憲法、教育勅語、明治民法発布過程で男作りがされている。それは「富国強兵」政策路線下で「私」を捨てて国＝天皇のために喜んで一身を投ずる「公」に生きることが〈男らしさ〉の規範の表徴とされたも

17) 伊豆利彦は、1905年8月に漱石が『新小説』に発表した「戦後文界の趨勢」という談話での言葉を基に、漱石の戦後観について「西洋の強国ロシアに対する戦勝は精神界にも影響をあたえ、「向ふが人なら、吾も人だ」という「自信自覚」を生み、「日本はドコまでも日本である。日本には日本の歴史がある、日本人には日本人の特性がある」と考えるようになり、「自然の勢ひが西洋を標準としないで、日本といひ、自分を標準とすることになるから人間が窮屈でなくなる、バネした感じを以て対することになる」と述べた」と整理している。「夏目漱石の明治三十九年」「日本文学」（日本文学協会、1974年5月）

18) 岩波文庫『漱石文明論集』より講演「模倣と独立」（岩波書店、2005年4月）173p

19) 前掲書154p

のだった」²⁰⁾——これは当時の男性一般に与えられたジェンダーとしての役割を解りやすく図式化した渡邊澄子の文章であるが、果たして明治政府による「男作り」に対し、漱石の〈個〉はどのように反応したのであろうか。渡邊氏の言うー「公」に生きる〈男らしさ〉ーという文脈で漱石の個人史を問いただしてみると、そこに避けて通れない問題として浮上するのが、漱石の徴兵忌避という事実である。

江藤淳の年譜によると明治25（1892）年、即ち漱石25歳の項では「四月、分家、徴兵の関係で北海道後志国岩内郡吹上町17番地送籍、北海道平民となる」²¹⁾とある。ここで「徴兵の関係」での「送籍」とは、実は体のいい徴兵忌避のことなのであるが、これを半藤一利の著作²²⁾からもう少し詳しく見てみると、状況としては1889年1月に徴兵令が突然に改正され「中等学校以上の在学者に徴兵猶予を認め、同時にその最大限を二十六歳まで」となったことから、兄の配慮で「期限切れ」直前の漱石が「意思とかかわりなく北海道へ送籍されたものよう」である。当時はまだ開拓時代であり、人口もまだまだ少なかった北海道と琉球（沖縄）は「徴兵令の埒外におかれていた」ことから、この制度を抜け道として利用した、というのが〈漱石徴兵忌避〉の実際、ということになる。

こうした漱石の隠れた個人史を初めて掘り起こし、1960年代の終わり頃に「徴兵忌避者としての夏目漱石」²³⁾という論文で問題提起したのが丸谷才一であるが、漱石が北海道に〈送籍〉して徴兵を逃れた二年後に日清戦争が起こり、多くの若者が死傷した史実の裏、徴兵忌避したことが漱石の精神にどのような影響を及ぼしたかについて、この丸谷論文では以下のような指摘がなされている。

（前略）自分と違って徴兵忌避をしなかったせいで兵隊に取られ、いわば自分の身代りのように戦死して行った同年輩の若者たちに対するすまないという気持、自責の念、自分は卑怯者なのではないかという疑惑、ひょっとすると自分の単なるエゴイズムなのかもしれないものへの悔いは、もっと痛切に彼を苦しめたであろう。（中略）漱石はこんなふうに潔癖に自分を責め、それがきっかけで神経衰弱になった、あるいはすくなくともこのせいで神経衰弱をいよいよこじらせた、とぼくは想像する。²⁴⁾

このような、徴兵忌避による「自責の念」が「痛切に彼を苦しめた」とする丸谷氏の見解は、「神経衰弱をいよいよこじらせた」ことが、ひいては「迷いと不安のあげくの逃亡」という形で〈松山への都落ち〉の原因にも繋がっているとする画期的なものであったが、漱

20) 渡邊澄子「ジェンダーで読む夏目漱石」「国文学 解釈と鑑賞」（至文堂、2005年6月）6p

21) 江藤淳『決定版 夏目漱石』（新潮社、1987年7月）563p

22) 半藤一利『漱石先生ぞな、もし』（文芸春秋、1996年3月）当該部分は144p-151pからの抜粋。ちなみに半藤から見て漱石は義理の祖父に当たる。

23) 丸谷才一「徴兵忌避者としての夏目漱石」「展望」（筑摩書房、1969年6月）

24) 前掲書152p-153p

石の内部に確立されていた〈個〉を重視する立場の人からは、〈徴兵忌避→神経衰弱〉という流れは否定されている。

水川隆夫は「私の個人主義」における言説を、徴兵忌避をした25歳当時の漱石の精神状況解明に援用しながら、「漱石はすでにこの頃から、国家の意思よりも個人の意思を尊重する「個人主義」（「私の個人主義」）の立場に立っていた」と言うことができ、「彼は、自分自身が「個性の発展」（「私の個人主義」）によって社会に貢献するためには、国家が強制する兵役の義務（明治憲法第二十条）を忌避してもかまわないと考えた」ので「私は、日清戦争時の漱石が丸谷氏のいうような罪の意識に悩んでいたとは思えません。むしろ、徴兵忌避は自分を生かすための正しい選択であったとする自負や誇りをもっていただのではないのでしょうか」²⁵⁾と述べている。

この水川の丸谷批判については、同氏の援用した「私の個人主義」の言説を眺めた上、二つの観点から考察されなければならないだろう。すなわち第一には「他人本位」であった漱石が英国留学の間に悪戦苦闘の末「自己本位」という、漱石流個人主義の極意を身につけていく、というのが「私の個人主義」という一種のコンフェッションにおける基本的な文脈だったという点から考えて、果たして「私の個人主義」に表れるような〈個〉が25歳当時の漱石に実際芽生えていたかどうか、という点である。また、第二としては「私の個人主義」に述べられている相反する内容の二つの言説、即ち「我々は他が自己の幸福のために、己れの個性を勝手に発展するのを、相当の理由なくして妨害してはならない」²⁶⁾といった、水川氏が拠り所としているような発言と、それとは別に漱石が説いている

「国家が危くなれば個人の自由が狭められ、国家が泰平の時には個人の自由が膨張して来る、それが当然の話」²⁷⁾といった〈危急存亡時における国家優先〉発言のどちらかが、1892年、漱石25歳当時の真理に近かったかという問題である。

第一の点については資料の点において、これを立証するものがほとんどないことから非常に確認することの難しいことであるが、第二の点においては、半藤一利氏が指摘している、明治10年代には徴兵忌避についてのノウハウ本が相次いで出版²⁸⁾され、漱石の帝大同期生のうち数名がやはり北海道へ送籍している事実からすれば、漱石の〈個〉が、「国家」の前にも比較的萎縮しない環境下で実行されたことは十分に考えられる。「兵役から免れる手段をとることが国家への反逆となるわけではなかった」²⁹⁾というこの時期、「我々

25) このパラグラフにおける水川隆夫からの引用文は、同氏著平凡社新書『夏目漱石と戦争』（平凡社、2010年6月）の28pから29pからのものである。

26) 夏目漱石「私の個人主義」『漱石全集 第十六巻』（岩波書店、1995年4月）603p

27) 前掲書611p

28) 半藤一利「続・漱石先生ぞな、もし」（文芸春秋、1994年1月）107pによる。

29) 半藤一利「漱石先生ぞな、もし」（文芸春秋、1996年3月）146p

は他が自己の幸福のために、己れの個性を勝手に発展するのを、相当の理由なくして妨害してはならない」という、その後の「私の個人主義」に表れる漱石の強烈なく個>そのものではないにしろ、25歳の将来あるエリート文学青年の心中は「自己の幸福のため」の自由を求める気持が支配的であり、漱石の徴兵忌避自体は左程深刻なものでもなかったと見ることもできるのではないか。日清戦争を2年前にした風雲急を告げる時代とはいえ、まだ実際に戦争は起こっておらず、起こるかどうかわからない時期の話だからである。

そういう意味では丸谷才一氏の「徴兵忌避者としての夏目漱石」は、漱石の個人史についての、やや情緒過多なレポートと言えるのかも知れないし、漱石は渡邊澄子の言う「男作り」に対して、兵役という点からは巧く逃れたと言うこともできる。

しかしながら、ここで翻って『草枕』のテキストとの関連で言うならば、漱石の徴兵忌避という動かししようもない事実は、意外にもここに反映されていると思われる部分があるので、それを以下に述べてみたい。

「なあに、あなた。やはり今度の戦争で———これがもと志願兵をやつたものだから、それで招集されたので」

老人は当人に代つて、満州の野に日ならず出征すべきこの青年の運命を余に語けた。30)

これは『草枕』第八章にて、久一が数日後には日露戦争に出征していくという状況を、叔父にあたる「老人」が画工に説明する場面である。ここで久一が「志願兵」だったという叙述をそのまま文字通りに受け取ると、久一は愛国の徒として自ら軍隊に入ることを択び、そして「満州の野」に赴く運命となったことになる。しかし『草枕』が久一をそのようなロマンチックな愛国青年として描いてはいないことは、彼が「へ、へ、へ。硯を見付けないうちに、死んで仕舞さうです」31)という、些か軟弱とも言える物言いをしていることや、上記引用部分の直後に「此夢の様な詩の様な春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは温泉のみと思ひ詰めて居たのは間違である」32)という〈戦争の現実〉を画工が思い知り、語り手である彼が「朔北の曠野を染むる血潮の何万分の一かは、此青年の動脈から迸る時が来るかもしれない」33)と感想を漏らすことを引き合いに出すだけで十分に理解できるであろう。

30) 夏目漱石『草枕』第八章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 105 p

31) 前掲書104 p

32) 前掲30) 105 p

33) 前掲30) 105 p

それでは、何故漱石は久一出征の説明にわざわざ「もと志願兵」（傍点論者）だったなどという情報を付け加えたのであろうか。それを「『草枕』における〈個〉に関する考察」という本稿の趣旨に沿って普通に考えれば、久一は平和時には〈個〉として軍隊に入ったが除隊し、その後戦争の開始により〈個〉ではなく国家の意思により徴兵された、という皮肉を表している、と解釈するのが無難であると考え。しかし、それが単なる〈皮肉〉以上の深い意味を持つかもしれない根拠があるので、ここで触れてみることにする。

ここに一つの論文がある。「『女』と『那美さん』—呼称から『草枕』を読む」³⁴⁾というものであり、論文の内容自体はタイトル通り『草枕』の中で、ヒロイン「那美さん」の呼称が、場面や登場人物によって様々な変化を見せていることを指摘したものが骨子となっているが、その中で当該論文の主旨とは余り関係がないと思われる記述の中に、以下のよう注目すべき箇所がある。少し長く、しかも分かりにくい、非常に重要な部分なので、すべて引用してみることにする。

（前略）こうした質問を発する那美の真意を特定することは難しいが、ここで二つの点を確認しておきたい。一つは久一が「もと志願兵をやつたものだから、それで招集された」という設定である。陸軍の場合通常の徴兵が三年の現役と予備役四年（後備役五年）の義務を負うのに対して、志願兵は現役が一年で予備役が二年（後備役は五年）で済むという「裕福で高学歴の青年を優遇するために作られた兵役上の特権的制度（大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』立風書房 1987）である。（在学中徴兵猶予になっていた者は卒業後「抽選ノ法ニ依ラスシテ徴集」されるが「一年志願兵ヲ志願シタル者ハ此限ニ在ラス」という徴兵令の条項があり、一年志願兵をしないと徴兵の確率がきわめて高くなるという仕組みになっていた。）一年志願兵は「特別ノ教育ヲ授ケ」られて予備役少尉になる者が少なくなかったようであるが、予備役は「戦争若クハ事变」でなければ招集されず、久一は予備役士官であったとしても事実上兵役義務から解放されていたはずが、日露戦争が総力戦になったために、凶らずも戦場に向かうことになった青年なのである。

パラグラフにある「こうした質問」とは、那美さんの最終章における「短刀なんぞ貰うと、一寸戦争に出て見たくはなりやしないか」という、久一に対する謎の問いかけのことであり、この台詞には「死ぬ許りが国家の為でもあるまい」と言う一方で餞別に短刀を贈与する父（＝久一の叔父）に対する逆説的な抗議の念が含まれている、とするのが論者である高田知波の見解である。しかし、そのことはこの際重要ではない。私の論考上大事なのは、

34) 高田知波「『女』と『那美さん』—呼称から『草枕』を読む」「国文学解釈と鑑賞」（至文堂 2005年6月）127p-128p

上記引用文の内容が正しいとするならば、久一の「もと志願兵」とは、一種の〈消極的な徴兵忌避〉に近いものに相当すると考えられなくもない、ということである。『草枕』では久一の家族関係はまったく謎に包まれており、彼が「裕福で高学歴の青年」であるかは明確には伺い知ることはできないが、那美さんの実家である「那古井」の宿が「村のものもちで、湯治場だか、隠居所だか」わからないという茶店の老婆の証言（第二章）や、久一が住んでいる、那美の兄の家が「蜜柑山」の「立派な白壁の家」（第十二章）であるという、この一族のステータスを考えると、彼が「兵役上の特権的制度」の恩恵を被る資格がありそうなことは、ある程度推測できる話である。

そんな久一が「日露戦争が総力戦になったために、凶らずも戦場に向かうことになった」のであるが、ここに〈送籍〉という裏技の徴兵忌避により〈個〉を貫いて日清戦争で命を落とすことになかった漱石との決定的な違いが浮彫りにされる。と同時に何故漱石が久一にわざわざ「もと志願兵」という前歴を付したのか、という詮索に対する答えのヒントがここに潜んでいるのではないかと考えられる。漱石の徴兵忌避が、丸谷氏が言うような、神経衰弱の原因であったかどうかは分からない。しかし、実際に〈送籍〉により徴兵忌避をしなかった正直な若者たちは、日露戦争には程度の上で及ばないにしても日清戦争で多く死傷していったのである。そのことがやはり実直な夏目漱石の人生や著作に全く影響を与えなかったとは言い難いであろうし、丸谷氏の言う「自責の念」や「潔癖に自分を責め」る気持は、ある程度のリアリティーを持って受け入れていいのではないだろうか。

資料的にはまだ十分とは言いがたく、現在のところ仮説に過ぎないものの、〈消極的な徴兵忌避者〉としての「もと志願兵」久一が戦地に赴くという『草枕』のアイロニーは、漱石が自分を罰する意味合いを込めて設定された面も含まれているのではないだろうか。こう考えると「久一さん。御前も死ぬがいゝ。生きて帰つちや外聞がわるい」³⁵⁾、「死んで御出で」³⁶⁾と那美さんが叫ぶとき、何かの「漱石コード」³⁷⁾がそこにビルトインされていると思われるのである。なぜなら権赫建の論文「夏目漱石の徴兵忌避研究」³⁸⁾に「日清戦争に参戦することを恐れていた彼は、徴兵忌避のため1892年（25歳）のときに北海道に戸籍を移し、1914年（47歳）のときに東京に戸籍を戻すまで22年間、徴兵忌避の実相が露見するかと人知れず悩み、不安を感じて生きた」とあるように、長年にわたって徴兵忌

35) 夏目漱石『草枕』第十三章。『漱石全集 第三巻』（岩波書店、1994年2月）162 p

36) 前掲書170 p

37) 「三四郎 百年の孤独 対談 姜尚中×栗坪良樹」（『国文学 解釈と教材の研究 2008年6月臨時増刊号 特集：漱石－ロンドン、中国などで何が起こったか』学灯社）にて姜尚中が使用した言葉。同対談10 p

38) 「동북아문화연구 제18집」（동북아시아문화학회, 2009年3月）「나쓰메 소세키의 징병기피 연구」。引用部分の原文（106 p）は次の通り。청일전쟁에 참전하는 것을 두려워했던 그는 징병기피를 위해 1892년(25세) 때에 홋카이도로 호적을 옮겼다가 1914년(47세) 때에 도쿄로 호적을 되돌려 놓기까지 22년 간 징병기피의 실상을 탄로날까봐 남모르게 고민하고 불안을 느끼며 살았을 것으로 판단된다。

〇〇〇
 避が精神的なしこりとして残っていたのは事実だと思われるからである。そこには大学講師としての、また英文学研究者としての、あるいは作家としての体面の問題もさることながら、多分に内面の問題、良心の問題もあったはずである。そして、このような精神的なしこりがあつたと考えれば第十章における「今に到る迄遂に動き得ずに、又死に切れずに、生きて居らしい」^{ひとだま}39)という水草や、「又一つ大きいのが血を塗つた、人魂の様に落ちる。又落ちる。ぼたりへと落ちる。際限なく落ちる」40)という、赤い椿による、まるで戦没者に対するクイェムような描写がなされた意味も増幅されるというものではあるまいか。

権赫建の論文は「もし彼に徴兵を忌避した経歴がなかったとしたら、日本の帝国主義の侵略戦争展開過程とその弊害について作品『草枕』(1906)、『門』(1910)等に具体的に描写した可能性が高く、講演、日記、書簡文等を通じて積極的に意思表示をしたであろう」41)と述べていることでわかる通り、漱石の苦悩を明らかにしたというよりも、徴兵忌避によって兵営生活を送ることのなかったこの文筆家の、帝国主義政策に対する「批判の限界」42)を問い質したものであり、「非人情」を押し出した『草枕』においては権の指摘通り、社会批評家としての漱石の影は全体的に薄いと判断されるべきであろう。その意味で漱石の〈個〉には限界があつたと言える。

しかし、幸徳秋水が日本帝国主義に反対⁴³⁾して絶えず警察に睨まれ続けた挙句、大逆事件(1910年)で殺されたことに象徴される暗い時代状況では、文筆家が「批判の限界」を露呈してしまうことは、ある意味で仕方のないことであり、そうした状況において漱石は『草枕』の中で作家として精一杯のことをしたのではないかと考えられる。それが「もと志願兵」である久一を戦場に送り込む、という徴兵忌避者・漱石の思いが込められたプロットであり、換言すればこの作家の批判精神は、その社会批評家的な立場としての限界ゆえに、長らく心の中で蟠っていた自身の徴兵忌避問題と結合し、久一を媒介としたく自己への批評〉に向かっていったと考えられるのである。

〈個〉を追い求める中、必ずしも深刻とは思われない状況で実現された漱石の徴兵忌避という隠れた個人史は、実際はその後もこの作家の心の中に秘かに影を落とし、それが

39) 夏目漱石『草枕』第十章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月)120p

40) 前掲書122p

41) 前掲38)106p。原文は次の通り。만약 그에게 징병을 기피한 경력이 없었다면 일본의 제국주의 침략전쟁 전개과정과 그 폐해에 대하여 작문『풀베개(草枕)』(1906)과『문(門)』(1910)등에 구체적으로 묘사했을 가능성이 높으며, 강연, 일기, 서간문 등을 통해서도 적극적으로 의사표시를 했을 것이다.

42) 前掲38)106p

43) 水川隆夫は『夏目漱石と戦争』(平凡社、2010年6月)の62pにて、日露開戦前、社会主義者・幸徳秋水や堺利彦、キリスト教徒・内村鑑三らは新聞「萬朝報」にて反戦を訴えていたが、時勢から同新聞社社長の黒岩涙香が開戦論に転じたことを契機にそろって退社したことを明らかにしている。

日露戦後の執筆にも拘わらず戦中を舞台として書かれた『草枕』のディテールにおいて、〈個〉を生きられなかった人々の痛みという形で亡霊のように浮かび上がってきた—そこに漱石の徴兵忌避問題と『草枕』との接点があると私は見る。徴兵忌避により国家に対して貫かれた漱石の〈個〉は、日清戦争から日露戦争に続く、日本という国家が膨張する時代の中では、実際には相当の辛さを伴わざるを得なかったのである。

4. 那美における〈個〉と「非人情」

このように、日露戦争による〈個〉の喪失、言い換えれば〈個〉として生きることと〈個〉として死ぬことも儼然ならないような若者がいた時代、明治維新の後に生れて自我を形成し、新しい精神を宿して世に出てきた当時最先端の敏感な感受性の持ち主たちは、どのように〈個〉を生きようとしたのであろうか。『草枕』における那美さんのエキセントリックな存在は、そのような種類の〈個〉を考える上で、貴重なサンプルになっていると思われる。

那美さんという登場人物のネーミングについては、『草枕』における画工の絵画的・非人情的視線からは〈刹那の美しい女〉という捉え方が可能と思われるし、この作品の随処に表れる〈中国趣味〉のようなものから、それが〈支那の美しさ〉とダブってイメージされるものとして考えることもでき得るだろう。しかし、更にここで作品中の、このヒロインの立ち振舞いや思考方法を含めた作品上の役割を考えると、那美の〈ナミ〉という音は、〈波〉即ちウェーブとしての存在を表すものとして捉えることも可能なのではないだろうか。

那美さんという登場人物を一言で言いくるめるならば、既存の価値観に基づかない、新しい行動規範の体現者としての存在、予測不能、理解不能の徴表そのものと言うことができよう。実際に『草枕』では、「花下に余を驚ろかし、まぼろしに余を驚ろかし、振袖に余を驚ろかし、風呂場に余を驚ろかし」^{きかみん}44)、また鏡が池の危巖^{きわん}にても「余」を驚かす存在として主人公に認識されている。また、例の「私は近々投げるかもしれません」^{わたし}45)、「さゝ^{をとこ}べ男も、男妾にする許ですわ」^{をとこ}46)といったセリフや禅僧に対する〈頸っ玉齧り付き事件〉など、数々の奇行で画工や周囲を驚かせる人物として描写され、一部の登場人物からは「き印」、「気狂い」などと呼ばれている。

このような那美さんの存在を、早くも予感させる描写として漱石が使ったのが、第三章

44) 夏目漱石『草枕』第十章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 129 p

45) 夏目漱石『草枕』第九章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 117 p

46) 夏目漱石『草枕』第四章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 56 p

の、那古井の宿についた瞬間に思い出される〈涛〉の描写である。そこで画工が回想するのが、昔房州（現千葉県の一部）⁽⁴⁷⁾を浜伝いに歩いたとき、ある宿で経験した「其晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寐られない」⁽⁴⁸⁾という不思議な一夜であり、そこは「障子をあげたら、庭は一面の草原」で、その先に草山が広がっているというロケーションなのであるが、「草山の向ふはすぐ大海原でどさん⁽⁴⁹⁾と大きな涛が人の世を威嚇しに来る」⁽⁵⁰⁾という感覚を主人公は経験する。このとき「余」は「とう⁽⁵¹⁾夜⁽⁵²⁾の明けるまで一睡もせずに」過ごすことになるのだが、ここで『草枕』全般における那美さんという登場人物の性格・役割を考えると「大きな涛が人の世を威嚇しに来る」という画工の感覚は、精神面における明治後期の時代風潮を連想させるような表現とも言えなくもない。それは平塚らいてうに代表されるフェミニズムの潮流、所謂〈新しい女〉の、当時の常人には理解し難く〈狂気〉であったり、また那美さんを離れては、『草枕』にも断片として語られる、藤村操の自殺といった一種浪漫主義的な純粹さから来る〈不可解〉であるとも言える。（因みにロマンティズムに浪漫主義という当て字をしたのが漱石であることは「教育と文芸」の中で本人が漏らしている⁽⁵⁰⁾）

『草枕』における那美さんの行動を見てみると、その特徴はまず第一に〈動き回る〉ことにあると言ってもよい。作品中の彼女の〈足どり〉を追ってみると、那古井の宿内における振袖姿での徘徊や突然の風呂場への〈闖入〉は言うに及ばず、宿の外においても観海寺や鏡が池には何度も足を運んでいるようであるし、また「姿見橋」などという、作品の舞台としては登場しない場所でも和尚に会い「また独り散歩かな」などと感想を抱かせる他、状況証拠的に考えれば峠の茶屋の婆さんのところにも出入りしている可能性もある。

このように、急に現われては消えていくヒロイン、そのときそのときで言動に変化のあるこの登場人物は、まるで寄せては返し、次々と逆巻いては巖に砕ける波のイメージを彷彿とさせるものであり、行く先々で突飛な振る舞いをする姿は、当時のある種ニューウェーブに属する人々に近い存在として人物造型がなされていると思われる。また、「ホ、ホ、と鋭どく笑ふ女⁽⁵¹⁾の声⁽⁵²⁾が、廊下に響いて、静かなる風呂場を次第に向へ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだ尻槽の中に突立つ。驚いた波が、胸へあたる」⁽⁵¹⁾（第七章）とあるように、波は画工

47) 千葉県館山市には、那古海水浴場、那古観音、那古船形駅などがあり、『草枕』における「那古井」の地名も、ここで「房州」がでてくることを考えると、同市の那古からイメージされてつけられた可能性がある。

48) 夏目漱石『草枕』第九章。『漱石全集 第三巻』（岩波書店、1994年2月）29p

49) 前掲書29p

50) 夏目漱石「教育と文芸」。『漱石全集 第二十五巻』（岩波書店、1996年5月）36p

51) 夏目漱石『草枕』第七章。『漱石全集 第三巻』（岩波書店、1994年2月）92p

を何かと揺さぶる演出としても使われている。

一体、那美さんのような人物がどうして出てきたのであろうか？

一般に現在、那美さんのモデルとして考えられている人物は二人いる。一人はもともと古くから言われていた、那古井の宿のモデルである前田家⁵²⁾の次女卓子^{つなこ}であり、これは熊本・小天温泉の観光パンフレットにも書いてあるくらい有名な定説であるが、この単純な事実を更に掘り下げて、実はこの女性が二度の離婚の後一時東京に身を移し、家族ぐるみで孫文らの中国革命を後押しして「支那革命のおばさん」と呼ばれるようになる猛女であったことを明らかにしたものとして、駒尺喜美の研究⁵³⁾がある。

そしてもう一人は、誰あろう平塚らいてうであるが、こちらの方は佐々木英昭が「「禅をする女」はどう読まれたか—『草枕』と『煤煙』—」⁵⁴⁾において、見性直後の禅僧との「接吻事件」や森田草平との関係などを例にとりながら、「平塚明子との類似点として列挙した那美さんの振る舞いの諸特徴—攪乱的な話法 (A)、芝居気 (A')、性的解放 (B)、死の覚悟 (C) 狂気 (D) —など」⁵⁵⁾として分析している通りである。

で、実際のところ那美さんのモデルはどちらなのか、ということになると、それぞれの説は資料的に説得力があり、また論考としてもよく練られているので、第三者としては一概には決めかねるところである。恐らく漱石はそれぞれの実在の女性の成分を自分の小説のモチーフに合うように抽出して那美さんという人物造型をした、というのが真相なのだと思う。^(B) ^{おどか} 前田卓子であれ、平塚明子 (らいてう) であれ、彼女たちが「大きな涛が人の世を威嚇しに来る」ような、革命的ウェーブを象徴するような女性であったことであり、作品に沿って言い換えれば、こうした時代の波を背負って登場したのが那美さんである、ということになる。^{うちき} ^{あら} 「もとは極々内気の優しいかたが、此頃ではだいぶ気が荒くなって」⁵⁶⁾という茶屋の婆さんのセリフ (第二章) は、那美さん個人の性格の変化を表したというよりも、この時代にそのような女性が多く現われ始めていることを表しているものと、私は解釈したい。

このように那美さんのモデルと言っても話は単純ではないのであるが、本稿はあくまでも『草枕』とく〈個〉に関するテーマの論考なので、話のスケールが大きくなり過ぎると予想される「支那革命のおばさん」の方はさておき、平塚らいてうを念頭において那美さんという人

52) 明治23年の第一回衆議院議員選挙に当選した前田案山子の一家で、その邸宅が那古井の宿のモデルとなったことはよく知られている。

53) 駒尺喜美「『草枕』の舞台裏—前田卓子と革命—」「日本文学」(日本文学協会、1974年5月)この論考にて駒尺は、中国の革命と縁のあった前田家と漱石の関係をつまびらかにし、『草枕』の最終章にて、文明批判の叙述の中に何故「革命」という言葉が何か所も挿入されているかという疑問を解き明かしている。

54) 佐々木英昭「「禅をする女」はどう読まれたか—『草枕』と『煤煙』—」「日本近代文学」(日本近代文学界、2001年10月)

55) 前掲書8p

56) 夏目漱石『草枕』第二章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 26p

物を見ていこうと思う。

先に挙げた佐々木英昭氏の論考における重要なポイントは、作品の中で那美さんが「厭味」な人物として造型されている、という指摘であり、ここで佐々木氏は「那美さんほど芝居気たつぷりな、厭味な不自然な、拵へ物の女は、さう類がないやうにさへ思はれる」という小宮豊隆の言葉を引用して問題提起を始めている。この小宮のやや辛辣なく那美さん評は、それと併行して佐々木氏により紹介される「私にはその那美さんが一番気に入ったのだから、何うにも仕様がな^い」という森田草平のコメントとの対比において興味深く、また森田の発言自体は何故＜煤煙事件＞が起こったのかというヒントにもなるであろうものである。

では、この二人の弟子の対照的ともいえる認識に対して、当の漱石自身は那美さんをどのように捉え、どのような考えに基づいて人物造型したのであろうか。

確かに小宮に言われてみると、『草枕』における那美さんの振る舞いは不自然で「厭味」な部分が多い。お馴染の風呂場でのシーンや振袖は勿論であるが、細かく見ていくと、例えば第四章では、まるで小女郎と示し合わせたかのように、急に襖の開いた先の中庭で「頼杖を突いて」画工の視界に入ってくる立ち振る舞いはいかにも不自然であるし、第九章では振袖について「見たいと仰やつたから、わぎへ、見せて上げたんぢやありませんか」57)などと言ってみたり、「私は近々投げるかもしれません」と言ってみたりするセリフにも「厭味」が相当感じられる。考えてみれば「ホ、、、」や「驚いたでせう」という頻繁に発せられる口癖もかなり「厭味」ではある。

また、そもそも画工が泊っている部屋は「近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段使つて居る部屋で我慢してくれ」58)、ということで当てがわれた部屋であるが、ここを「普段使つて居る」人が那美さんであることを考えると、彼女のある種の＜作為＞のようなものも感じられる。いくら「ほかの座敷は掃除がしてないから」といって家の人の部屋を客に使わせるだろうか？ 第一それでは那美さんはどこへ寝るといのであろう？ まさか一晩中振袖で宿内を徘徊するわけでもあるまい。そんなワザとらしさにも拘らず、そこが那美さんの部屋であることを知って「それは御気の毒な事をした」59)などと言っている画工は、ある意味でお人好しなのかもしれない。

で、こういう那美さんの不自然さ、ワザとらしさに対して画工は「自然天然に芝居をして居る」60)、「那美さんの行為動作と雖ども只其佷の姿と見るより外に致し方がない」61)と

57) 夏目漱石『草枕』第九章。前掲書114p

58) 夏目漱石『草枕』第三章。前掲52) 28p

59) 夏目漱石『草枕』第四章。前掲52) 47p

60) 夏目漱石『草枕』第十二章。前掲52) 147p

61) 夏目漱石『草枕』第十二章。前掲52) 149p

眺め、「あんなのを美的生活とでも云ふのだらう」⁶²⁾と理解につとめ、「自分でうつくしい芸をして見せると云ふ気がない丈に役者の所作よりも猶々うつくしい」⁶³⁾と褒めてさえている。小宮の言う「厭味」にも目を向けず、画工が彼女を美的に捉えようとする理由について、これを佐々木氏は「那美さんに惹かれている暗示」だと説明しているが、私はここに付け加えて漱石の〈個〉に対する考え方が出ているからだとして解釈したい。

たしかに「私は近々投げるかもしれません」などと他人の前で言うのは「厭味」^{をとお}ではある。しかも「私は近々投げるかもしれません」という、少々怖い発言と「さゝだ男もさゝべ男も、男妾にする許ですわ」という勇ましい発言を並べてみると、この二つは互いに矛盾するような言葉とも受け取られる。「さゝだ男もさゝべ男も、男妾にする許ですわ」という強気な那美さんが、なにゆえ急に「私は近々投げるかもしれません」などと言いつくすのか？ これは特に、二人の男性に「懸想」された挙げ句、悩んで死んだ長良の乙女や、梵論字との悲恋の末、鏡が池に飛込んだという、遙か昔の「志保田の嬢さま」に見られる古典主義的とでもいうべき生き方と比べてみれば、那美さんの二つの発言の真意は、ますますもって理解し難いものがある。

しかし、ニューウェーブの那美さんからすれば、これは矛盾でも何でもないのであって、要するに男の為に死ぬような主体性のないことはしないが、それでも自分に芽生えている鋭利で近代的な自我が、何かの、他人にはというてい解りようもない理想や、浪漫主義的な熱情や煩悶にかられたときには死ぬかもしれない、という意思表示なのだと思う。そしてこれは、例の〈煤煙事件〉を起したときの遺書に、平塚明子が「余は決して恋の為人の為に死するものにあらず自己を貫かんが為なり」との言葉を残したこと⁶⁴⁾と符合する生き方（というか死に方）である。

生きるときは〈個〉として生き、また死ぬときも〈個〉として死ぬのが、当時自己解放を求める者たちの、最先端の精神構造であったといえるのであるが、「対象が何であれ、自らが生死を賭けるに値する理想のために自らを捧げる能力と態度、これこそがロマン主義において最も重要なことであった」⁶⁵⁾という浪漫主義的思想の嵐は、北村透谷も高山樗牛も疾うにこの世を去り、また、新たなウェーブとして自然主義文学が台頭してきた明治時代の終盤において、なお一層過激な波動となって押し寄せていたと見るべきなのであろう。「熱

62) 夏目漱石『草枕』第十二章。前掲52) 147 p

63) 夏目漱石『草枕』第十二章。前掲52) 147 p

64) 川口さつき「明治後期における青少年の自我主義—平塚らいてうと藤村操」『ソシオサイエンス』15号（早稲田大学大学院社会科学研究所、2009年）69 p

65) 前掲書66 p。この論文にて川口は、浪漫主義を「近代個人主義を根本におき、秩序と倫理に反逆する自我尊重、感性の解放の要求を主情的に表現するもの」と定義したうえ、アイザイア・バーリンの言説に乗り取り、この本文のように述べている。

誠！熱誠！私どもはただこれによるのだ」66)とは、この当時の平塚らいてうの言葉である。

先ほど「「禅をする女」はどう読まれたか—『草枕』と『煤煙』—」という題目の論考をかなり参考にしたので、一応その主旨をここに記しておく、＜那美さんの意表をつく言動は「禅問答の伝統に根差している」のであり、禅の持つ「厭味」な部分を『草枕』において那美さんは一身に引き受けている＞というようなものである。本稿は『草枕』と禅についての関係を明らかにすることが目的ではないので、考察は差し控えることとするが、禅のことはともかく佐々木氏の論文を一つの手掛かりとしてこのようにあれこれ考えてみると、『草枕』における那美さんの「厭味」の正体には、当時の思潮を背景とした＜個＞の追究による烈しい自己主張の噴出、という面が少なからず含まれている、と見ることができるのではないだろうか。

そして、ここで効果を表すのが「厭味」な那美さんでも「非人情」な目で見ることによって美的に捉えることができるという、『草枕』にて編み出された人間観察の方法論であり、「さうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立つて、画中の人物が画面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる」67)という「非人情」のスタンスを画工が那美さんに対してとるとき、そのことは即ち「厭味」な那美さんを、二次元空間的な広がりの中で捉え、そのことにより那美さんの中に＜個＞を認めていこうとする努力を意味することに他ならない。動き廻る那美さんの「厭味」も一枚の絵画に切り取って収めるとき、そこには個性的な、一人の＜刹那の美しい女＞だけが現れることになるのである。『草枕』における＜個＞と「非人情」の関係とは、そのようなものだと思えることができる。

では何故那美さんのものに対して「非人情」のスタンスで臨むということが可能だったかということ、そのような精神構造にある人々の悩みを、近代的自我の頂点にあった夏目漱石はよく理解していたからだと思う。それは漱石が那美さんを、決して一方的に我の張った強い人間には描いていないことを見ても伺い知れることである。「軽侮の裏に、何となく人に(付)縋りたい景色が見える」、「悟りと迷いが一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る体だ」68)という画工の描写が意味するものは、取りも直さず＜個＞として生きることにより生じる、人間の精神的な不安定さであり、波のように動き回る那美さんの行動半径の広さも、裏を返せば＜行き場の無さ＞を表している。彼女が強さと脆さを併せ持つ人物像として造型された理由は、やはりこうした近代的自我からくる悩みの深刻さを表すためであると言えるだろう。悪戦苦闘したロンドン留学で、ついに「自己本位」を獲得しながらも、否、それ

66) 「元始、女性には太陽であった—『青鞥』発刊に際して—」『平塚らいてう著作集』第1巻(大月書店、1983年) 15p

67) 夏目漱石『草枕』第一章、『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 13p

68) 夏目漱石『草枕』第三章、『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 40-41p

ゆえ同時に〈個〉として生きることの淋しさを誰よりも身に染みて感じている漱石だからこそ、他人の自我というものを理解することもできたのであろうし、自分と他人の自我の衝突を最大限避ける術としての「非人情」のようなものが、『草枕』を超えた漱石の生活にも、おそらく生れていたのではないだろうか。

ところで、那美さんの「私は近々投げるかもしれませんが」の発言に関連して想起されることと言えば、当然「万有の真相は唯一言にて悉す、曰く『不可解』、我この恨を懷て煩悶終に死を決す」⁶⁹⁾ (ルビは論者) という言葉を残して華厳の滝に飛び込んだ、藤村操の死があげられるであろう。この、平塚らいてうと並んで当時のインテリ青年層の精神を代表するようなニューウェーブについては『草枕』の第十二章に記述がされている。いわく「かの青年は美の一字のために、捨つべからざる命を捨てたるものと思う。死そのものは洵に壮烈である、ただその死を促すの動機に至っては解しがたい。されども死そのものの壮烈をだに体し得ざるものが、如何にして藤村子の所作を嗤い得べき」⁷⁰⁾と漱石は綴っている。ここで漱石の視線は「捨つべからざる命」と生命の尊さを前提としながらも、その死に至る行為を必ずしも否定してはいない。「死其物の壮烈をだに体し得ざるものが、如何にして藤村子の所作を嗤い得べき」とは、要するに自殺した者の気持は、「死其物の壮烈をだに体し得ざるもの」つまり生きて人間には分からず、死んだ本人にしか分からない、ということに他ならないわけで、漱石はそこに那美さん対するものと同じような、「非人情」的観点で〈個〉を認め、「美の一字のため」という芸術論的な解釈で理解しようとしているのだと思われる。そうでなければ、若冠16歳の少年にして自分の教え子である藤村操の痛々しい自殺に対して、こうした冷静な態度でいられるはずはないからである。

ただ、このような態度、このようなものの見方が、実際に死んでしまった者や死にゆく者の前で、どのような意味や効力があるのか、ということになると、現実には非常に心もとないものがある。〈死〉とはまさに人間の活動が停止した状態にほかならず、「さうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立つて、画中の人物が画面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる」という「非人情」的なアプローチ方法は、対象物が動くからこそ必要かつ有効なもの、つまり〈動〉あつての「非人情」ということになるからである。対象物が永遠に動かなくなってしまう、消え去ってしまうことを意味する〈死〉という名の現実に対し、人々がこうした態度で臨むとき、それは「非人情」ではなく、もはや〈あはれ〉と化す。これを本稿のテーマに添って言い換えるならば、〈動〉あつての「非人情」とは、〈動〉あつての〈個〉であるということ

69) 磯田光一「“遊民”的知識人の水脈—屈折点としての藤村操—」『文学』(岩波書店、1986年8月)

70) 夏目漱石『草枕』第十二章。『漱石全集 第三巻』(岩波書店、1994年2月) 148 p

にもなるのである。

藤村操が死んだ翌年（1904年）、漱石が藤村操女子なる名前で詠んだ「水の底、水の底。住まば水の底」⁷¹⁾で始まる詩は、『草枕』の第七章で「浮かば波の上、沈まば波の底」⁷²⁾というく土左衛門賛>になって繰り返されるのであるが、ここには静かな死後の世界での暮らしを願うくあはれ>の情しか嗅ぎとることができない。

そう考えると、藤村操に対する漱石の見方も、冷静な態度でいられたというよりも、結局死んでしまった者には、その死に対して「非人情」な見方、美的な尺度で接することにより吊ってあげる以外、何らの手だてがないという悲しい現実を背負ってのものということになる。那美さんが本当に身を投げたとき、あるいは久一や那美さんのく元旦那>が死んだときも、同様の状況になるであろうことを考えると、人間の本質的な救済という意味では『草枕』という作品の限界がそこにあると思えてくるし、「草枕の様な主人公ではいけない」と漱石が語った理由もそのあたりにあるものと解釈できる。

ステーション

作品の結末、停車場というく現実>の中で那美さんの顔に浮んだ「憐れ」の表情も、画家の作品というく美>としては完成なのであろうが、「何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通」り「個性を踏み付けようとする」⁷³⁾汽車の前で無力なのは言うまでもないだろう。それでも「憐れ」の情を表すこととは、「神を頼まぬ」「神を持たぬ」（共に第十一章）漱石にとって、最大限く祈り>に近い行為なのかも知れないが……。

5. おわりに

以上、『草枕』において、それぞれ芸術、国家、生死、という領域で漱石のく個>に関する考え方がどのように表れているかを辿ってみた。「読者の頭に、美しい感じが残りさへすれば、それで満足」と作者が語る『草枕』にも、他の漱石作品と同様、やはり個人や自我といったものとは切り離すことのできない要素を孕んでいることは確認できたのではないかと思う。

「パーソナリチーの世の中である。出来る丈自分を張りつめて、はち切れる許りにして生きて居る世の中となる」⁷⁴⁾とは、『草枕』執筆前後である1905年乃至1906年ごろ、漱石が徒然に綴った走り書きの断片である。く個>を意識し、個人としてどう生きるか、というこ

71) 「水底の感」1904年2月8日付寺田寅彦宛書簡、『漱石全集 第二十二巻』（岩波書店、1996年3月）296 p

72) 夏目漱石『草枕』第七章。『漱石全集 第三巻』（岩波書店、1994年2月）87 p

73) 夏目漱石『草枕』第十三章。『漱石全集 第三巻』（岩波書店、1994年2月）167 p

74) 「断片」『漱石全集 第十九巻』（岩波書店、1995年11月）208 p

とが人生のテーマであったこの作家の小説『草枕』は、その存在自体が世にも個性的であり、また「非人情」という独特の方法論により、登場人物の〈個〉を美的に描き出すことにも成功している。しかし同時に〈国家〉に翻弄される〈個〉の悲劇や、近代的な自我を持った〈個〉として生きることの辛さや痛みも作品には内包されており、「非人情」なものの見方では煩悶や人間の死という現実からの救済としては限界があることが、図らずも露呈されてしまっていると言える。そうした問題が『草枕』以降の作品においていかに展開・解決されてくるのかは、大いに興味のあるところである。また、漱石が描こうとしている〈個〉の問題は、今回取り上げたもの以外にも〈男女・夫婦における個の問題〉、〈親子・家族における個の問題〉、〈社会組織における個の問題〉など、様々なものがありえると思うが、それらが『草枕』や他の漱石作品でどのように扱われているか、引き続き漱石作品に注目し見ていくことは意義があると思われる。

【参考文献】

- 權赫建 「나쓰메 소세키의 징병기피 연구」 「동북아문화연구 제18집」 (동북아시아 문화학회、2009年3月)
- 伊豆利彦 「夏目漱石の明治三十九年」 「日本文学」 (日本文学協会、1974年5月)
- 磯田光一 「“遊民”的知識人の水脈－屈折点としての藤村操－」 「文学」 (岩波書店、1986年8月) 2p
- 江藤淳 『決定版 夏目漱石』 (新潮社、1987年7月) 41-42p、563p
- 川口さつき 「明治後期における青少年の自我主義－平塚らいてうと藤村操」 「ソシオサイエンス」 15号 (早稲田大学大学院社会科学研究所、2009年) 66p、69p
- 姜尚中・栗坪良樹 「三四郎 百年の孤独 対談姜尚中×栗坪良樹」 (「国文学 解釈と教材の研究 2008年6月臨時増刊号 特集：漱石－ロンドン、中国などで何が起こったか」学灯社) 10p
- 駒尺喜美 「『草枕』の舞台裏－前田卓子と革命－」 「日本文学」 (日本文学協会、1974年5月)
- 佐々木英昭 「『禪をする女』はどう読まれたか－『草枕』と『煤煙』－」 「日本近代文学」 (日本近代文学界、2001年10月) 59p、60p、61p、62p-63p
- 高田知波 「『女』と『那美さん』－呼称から『草枕』を読む」 「国文学解釈と鑑賞」 (至文堂2005年6月) 127p-128p
- 夏目漱石 『草枕』 『漱石全集 第三巻』 (岩波書店、1994年2月) 引用ページは脚注参照
- 夏目漱石 「現代日本の開化」 『漱石全集 第十六巻』 (岩波書店、1995年4月) 415p-440p

- 夏目漱石「私の個人主義」『漱石全集 第十六巻』（岩波書店、1995年4月）603 p、611 p
- 夏目漱石「文学論」の一節。『漱石全集 第十八巻』（岩波書店、1979年8月）9 p
- 夏目漱石「断片」『漱石全集 第十九巻』（岩波書店、1995年11月）208 p
- 夏目漱石「水底の感」1904年2月8日付寺田寅彦宛書簡、『漱石全集 第二十二巻』（岩波書店、1996年3月）296 p
- 夏目漱石1906年10月26日付鈴木三重吉宛書簡 第二信。『漱石全集 第二十二巻』（岩波書店、1996年3月）605 p、606 p
- 夏目漱石1906年9月30日付森田草平宛書簡。『漱石全集 第二十二巻』（岩波書店、1996年3月）568 p
- 夏目漱石1906年7月2日付高浜虚子宛書簡。『漱石全集 第二十二巻』（岩波書店、1996年3月）519 p、520 p
- 夏目漱石「教育と文芸」。『漱石全集 第二十五巻』（岩波書店、1996年5月）36 p
- 夏目漱石「余が『草枕』」『漱石全集 第二十五巻』（岩波書店、1996年5月）211 p、212 p
- 夏目漱石「模倣と独立」『漱石文明論集』（岩波書店、2005年4月）154 p、173 p
- 平塚らいてう「元始、女性は太陽であった—『青鞥』発刊に際して—」『平塚らいてう著作集』第1巻（大月書店、1983年）15 p
- 半藤一利『漱石先生ぞな、もし』（文芸春秋、1996年3月）144 p-151 p
- 半藤一利『続・漱石先生ぞな、もし』（文芸春秋、1994年1月）107 p
- 丸谷才一「徴兵忌避者としての夏目漱石」「展望」（筑摩書房、1969年6月）152 p-153 p
- 水川隆夫『夏目漱石と戦争』（平凡社、2010年6月）28 p-29 p
- 渡邊澄子「ジェンダーで読む夏目漱石」「国文学 解釈と鑑賞」（至文堂、2005年6月）6 p

要 旨

夏目漱石の『草枕』は、一般には「非人情」というキーワードに括られ、この作家の作品としては珍しく美的側面が強調されている小説であると認識されている。しかしここにも漱石の他の作品に表れるが如き、明治維新から近代国家形成過程における知識人の苦闘する姿が随所に見受けられ、日本人が〈個〉を意識しはじめた時期の、このような軌跡が反映されていることを確認することができる。

本稿では『草枕』執筆当時の漱石の創作態度、『草枕』に表れた日露戦争と漱石の個人史、那美というヒロインのキャラクターの三点に注目し、〈個〉の問題との関連で考察を試みた。執筆当時の創作態度では、いくつかの書簡に表れた漱石の気概の中に、「読者の頭に、美しい感じが残りさへすれば、それで満足」というソフトな言葉とは裏腹に、この作家が〈個〉の芸術を意識し、いかに西洋に追随するだけではない個性を真摯に求めていたかを伺い知ることができた。また日露戦争との関連では、久一の出征に、漱石の徴兵忌避という個人史が微妙に反映されているのではないかという仮説のもとに、『草枕』が戦争という〈個〉を生きられない時代を背景としていることの意味について触れてみた。また那美については、平塚らいてうという当時のニューウェーブとも言える人物がモデルとなっていることを頼りに、このヒロインの奇矯さの源を浪漫主義的なものに求めると同時に、『草枕』のキーワードである「非人情」が、主人公が那美に〈個〉を見出す方法として用いられているとの解釈を試みた。

キーワード：近代化、非人情、日露戦争、徴兵忌避、浪漫主義、平塚らいてう、藤村操

투 고 : 2011. 5. 31
1차 심사 : 2011. 6. 11
2차 심사 : 2011. 6. 25